上：紅はるかの干し芋の加工風景

左：マルサフルーツ古屋農園で栽培された紅はるかの畑

経営者の古屋氏は、「耕作放棄地を解消することで景観の保全に繋がり、その農地を活用できることはうれしい。」また、「農閑期の事業の拡大と年間を通しての雇用、そして、村おこしのきっかけになればということで、サツマイモという新たな作物の栽培を始めることができた。」とうれしそうに語ってくれました。

両者とも大変お忙しい中、取材に協力していただいき、ありがとうございました。

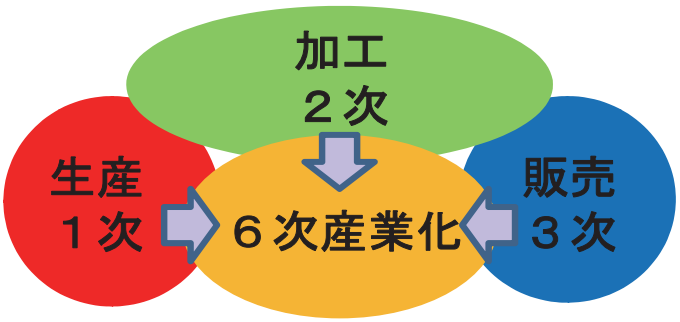
企業的農業経営推進支援モデル事業とは？

企業的農業経営推進支援モデル事業とは、事業主体に対して、オーダーメイドの生産基盤整備を支援する事業です。

山梨県の農業を持続的に発展させていくためには、多様な担い手の確保・育成と儲かる農業の実現が重要です。このことから、意欲的な農業法人や農業参入を目指す企業による農地の有効活用や、**６次産業化**などによる所得の増加、地域の活性化に向けて事業を実施しています。

６次産業化とは？

６次産業化とは、農産物の生産を行う（**第１次産業**）だけでなく、食品加工（**第２次産業**）、流通、販売（**第３次産業**）にも農業者が主体的かつ総合的に関わることによって、今まで第２次・第３次産業の事業者が得ていた付加価値を、農業者自身が得ることによって農業を活性化させようという考え方です。



写真：笛吹市にて
（有）「マルサフルーツ古屋農園」
取締役　古屋　貞一氏

目指せ!! 儲かる農業!!

写真：甲州市にて
（株）「Kisvin」
取締役　荻原　康弘氏

上：Kisvinで栽培されたぶどうの宝石箱

ワインへのこだわり「Kisvin」

ぶどう作りに力を注いでいる株式会社「Ｋｉｓｖｉｎ（キスヴィン）」では、ワイン醸造用ぶどう約20種類・生食用ぶどう約60種類栽培しています。

企業的農業経営推進支援モデル事業で、ワイン醸造用ぶどうの生産量増加を目的に、約１ヘクタールの農地において、農地段差と窪地の解消の基盤整備を行いました。

経営者の荻原氏は、良質なワイン作りのためには収穫量を増やし、たくさんのぶどうから良質なものを厳選することが大切だと考えています。

そのため、「整備をすることで農地に機械が入りやすくなり作業時間の軽減に繋がった。」また、「私が考えた新たなぶどう棚のシステムを有効に活用し、少ない労力で効率的に作業を行い、栽培規模を拡大し収穫量を増やすことができるようになる。」と力強く語ってくれました。

国の６次産業化事業でワイナリーも整備され「Ｋｉｓｖｉｎ」というブランドのワインとしてみなさまのもとに届けられる日も近いと思います。

新たな挑戦「マルサフルーツ古屋農園」

有限会社「マルサフルーツ古屋農園」では、もも、ぶどうを中心に栽培を行っています。そして、平成24年度から新たな作物の栽培を行うため、約１．６ヘクタールの耕作放棄地を解消し、土壌の改良を行いました。

この農地で栽培するのは、栽培が難しいため、希少だと言われている「紅はるか」という品種のサツマイモです。このサツマイモを自社で加工し、干し芋として出荷する計画で、６次産業化の取り組みとしてニュースにも取り上げられました。